



しびき



CONTENTS

- 12 平成23年暦年出荷実績
- 11 平成23年度上期出荷実績
- 10 識者による講演会 ケビン・メア氏
- 6 米国視察報告
- 5 ICDM役員会(平成23年12月8日、ワシントンDC)
- 4 AOSD役員会(平成23年11月29日、香港)
- 1 平成24年賀詞交歓会

63



ドラム缶工業会 賀川彰理事長

平成24年 賀詞交歓会

理事長挨拶 工業会活動計画について

ドラム缶工業会の賀詞交歓会が1月12日(木)、鉄鋼会館で開かれました。同工業会を代表して、賀川彰理事長は本年の課題・活動について下記のように述べました。



皆様、明けましておめでとうございます。

本日は、ご多用のところ経済産業省塩田鉄鋼課長様はじめ、ご来賓の皆様、会員の方々、多くの皆様にご出席を賜り、誠にありがとうございます。理事長として一言ご挨拶をさせていただきます。

昨年を振り返れば、日本そして世界において、政治、経済、社会面で想定外、予想外の出来事や問題が次から次へと起こりました。日本では東日本大震災と津波、放射能の広域汚染、サプライチェーン寸断と電力制限、異常な円高、世界に目を転じれば、米国財政問題、欧州金融危機、アフリカ・中近東の長期政権の崩壊、中国などの発展国の成長減速、タイの大洪水、そしてイラン制裁強化などです。これらの出来事や問題が直接あるいは間接的に日本経済に、そしてドラム缶産業に大きな影響を及ぼしました。まさに激動の1年でありました。

これらの問題は、その多くが根本的解決に至らず、先送りになって年を越しています。問題は複雑で根が深く、また相互に関連していて容易には解決できそうにありません。特に内需不振により、輸出に依存せざるを得ない日本の産業にとって、円高は大きな負担になっています。また欧州金融問題はいつ破綻してもおかしくない危険な状態であり、一旦破綻すれば連鎖反応が起きて、リーマンショック以上の世界同時不況が再来するかもしれません。

また中国の成長減速やイラン制裁強化の影響も気にかかるようです。

このような環境のなかで、昨年のドラム缶工業会は、大震災の直後に、経済産業省のご指導のもと、中島前理事長の強いリーダーシップにより、ただちに5,000本のドラム缶緊急無償提供を実行しました。またサプライチェーン寸断、電力制限のなか、各社の努力で安定供給の責任を果たすことができました。

さらにドラム缶、ペール缶の品質、価格競争力向上と、業界の次世代を担う若手育成を狙って、米国と欧州に技術調査団を派遣しまして、品質・規格、設備、輸送についての調査を行い、貴重な情報を集めることができました。激変の年としては満足のいく活動であったと思います。

さて、今年のドラム缶業界のキーワードは何でしょうか。私は「国際競争力」だと考えます。

ドラム缶そのものは国際貿易品ではありません。国内に限られたビジネスです。これまでは国際競争をほとんど意識してきませんでした。しかし、需要家産業は円高のもと、過酷な国際競争を強いられております。我々ドラム缶メーカーも彼らの痛みを共有し、少しでも貢献できるように国際競争力の強化を考えていくべき時であります。

近隣諸国と比べれば、鋼材価格、人件費、物流コスト、税金など多くのハンディキャップはありますが、我々には高い技術力と需要家との厚い信頼関係があります。部品・設備・資材の海外調達などコストダウンに努めるとともに、技術開発を進め、情報を積極的に収集し、スペックの国際化などの対策を需要家に提案し、需要家とともに対策を図るなど、できること、やるべきことは数多くあります。もちろん、個々の企業の自助努力が

ベースとなりますが、工業会として活動せざるを得ない、あるいはそのほうが有効なものは積極的に対応していきます。仕様標準化、海外動向調査、需要家への情報提供や働きかけ、国際規格改善などです。同時に、従来通り業界の技術力向上のための活動、国際交流の推進、更生缶業界との協力関係強化、VOCやCO₂削減などの環境問題、職場安全活動のサポート、若手の育成などを進めていきます。

今年も工業会として取り組むべきことは数多くあります。関係先のご支援を得ながら、皆様と力をあわせ、着実な成果につなげていきたいと思っております。よろしくご協力ください。最後に、今年が実り多い一年となりますこと、併せて皆様のご健勝を祈念して新年の挨拶といたします。

理事長の挨拶に続き、経済産業省製造産業局鉄鋼課の塩田康一課長より、概要下記の祝辞をいただきました。

皆様明けましておめでとうございます。本日はお招きいただきましてありがとうございます。昨年を振り返りますと東日本大震災があり、非常に大変な年であったと思えます。ドラム缶工業会におかれましては震災の際にドラム缶を緊急に提供していただき、大変心強く、ありがたく思いました。被災地の多くではガソリンスタンドはほとんど流されてしまい、ドラム缶から直接車にガソリンを入れておまして、ドラム缶は現地の被災者にとって、また復旧支援にとって大変役立ちました。この場を借りて改めてお礼を申し上げます。震災のほか、去年はタイの洪水などもあり、サプライチェーンが寸断されるなど日本経済にとって非常

に厳しい年でありましたが、製造業全体としては、その後サプライチェーンも皆様のご努力により、なんとか復旧に向けて今動いているというところあります。年を越えて、円高の状況ですとか、欧州経済の状況とかで、今年も大変な、厳しいことも予想されておりますが、経済産業省としても皆様方への





経済産業省 製造産業局 鉄鋼課 塩田康一課長



日本ドラム缶更生工業会 稲葉豊会長



ドラム缶工業会 野上正道副理事長 (ジャパンペール社長)



ドラム缶工業会 山本雄造副理事長 (山本工作所社長)

経済支援をはじめ様々な施策を年末から新年にかけてやっております。日本経済が早く本来の力強さを発揮するよう、こちらとしても頑張っていきます。円高で皆様大変ではありますが、中国は日本よりも高い成長率でありますし、そういう海外事情を取り込んでいくということで、国際競争力の向上を図るなど、そのほかいろいろと課題もあると思いますが、日本経済の発展を期待し、また、海外での事業の発展にも、私どもも、皆様と一体となって、力を尽くしてまいりたいと思っております。本年もよろしくお願いいたします。

続いて、日本ドラム缶更生工業会の稲葉豊会長は、概要次のように挨拶されました。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。震災のときによく使われる言葉が「絆」、それと「復興」であります。私は、「絆」という言葉を結婚式のスピーチでよく使いましたが、この「絆」という言葉は、災害復興において今年も強く申していかなければと思っております。更生缶業界ですが、残念ながら、新缶業界と違いましてリーマンショックから未だ回復しておりません。ですから私は、今年は「反転」という言葉を更生缶業界のキーワードに使いたいと思います。リーマンショックの底をついた、そこから元に戻るぞということで「反転」という言葉を

使いたいと思います。再生缶業界は社数では70社くらいになっておりますが、中小企業の集まりでありまして、まさに「絆」ということを大切にしながら、合従連衡をどんどん進めていきたいなどの認識もっております。新缶業界さんに負けず劣らず、今年以降、反転していきますので、皆様、よろしくお願いいたします。

お二人からの祝辞に続き、野上正道副理事長（ジャパンペール社長）が乾杯の音頭で、「昨年は大震災、津波、原発事故による放射能汚染があり、続いてタイの洪水と、日本にとりまして大変な年でありました。本当に厳しい年でありましたが、ドラム缶工業会におきましては、欧米に技術調査団を派遣しまして、日本にない素晴らしい溶接、製缶技術など様々な貴重な情報を得てきました。今年は厳しい状況がまだ続くと思っておりますが、こうした情報を生かしまして、需要家の皆様方のために、また日本経済のために頑張っていきたいと思っております。今年は自然災害のない穏やかな年になりますよう」と挨拶し、乾杯の発声で、和気あいあいとした歓談、意見交換が行われました。

中締めでは、山本雄造副理事長（山本工作所社長）が「日本のドラム缶の品質の確かさは世界に冠たるものがあり、技術力を磨きながら、これからも頑張らましよう」と挨拶しました。

AOSD役員会

第8回AOSD国際会議

平成25年(2013年)開催を確認

平成23年11月29日
中国 香港にて

平成23年11月29日、アジア・オセアニアのドラム缶製造業者組織であるAOSDの役員会が中国の香港で開かれました。

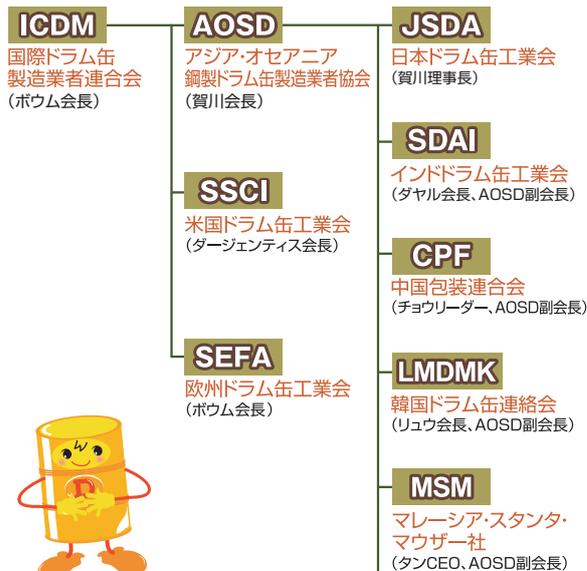
最大の議題は、2013年に予定している第8回AOSD国際会議に関する意見交換でした。前回2010年の第7回国際会議のときは、2008年のリーマンショックの後の不安定な時点で開催を確認し、その後、AOSD会員の皆様の協力のもとで国際会議は成功裡に実施されました。今回も世界経済の不透明感が消えない状況下であり、東日本大震災とそれに続く原発災害、タイの政情不安と洪水などの不安定要因は残っています。しかしながら、このような時期ではありますが、国際会議を2013年に開催すること出席者全員が賛成しました。

開催地については、当役員会メンバーから、タイ(バンコク)を推す声が高く、全員一致でタイが可能ならタイでと決まりました。タイの大手2社にはマレーシアのタン・チェン・チャイAOSD副会長から打診していただくことになりました。

もうひとつの大きな議題であるAOSD会則の修正は会費徴収と役員会機能の拡大に関するもので、原案通りで了承されました。会費徴収の時期に関しては、今後役員会で検討し決定することになりました。

ドラム缶製造業者の国際組織図

平成23年11月29日時点



ICDM: International Confederation of Drum Manufacturers
AOSD: Association of Asia Oceanic Steel Drum Manufacturers
SSCI: Steel Shipping Container Institute
SEFA: Syndicate Europeen de L'Industrie des Futs en Acier
JSDA: Japan Steel Drum Association
SDAI: Steel Drum Association of India
CPF: China Packaging Federation (Steel Drum Special Committee)
LMDMK: Liaison Meeting of Drum Makers in Korea
MSM: Malaysia Stanta Mauser



AOSD役員会メンバー

前列中央
賀川AOSD会長 (日本)

前列右
リュウAOSD副会長 (韓国)

前列左
タンAOSD副会長代理 (マレーシア)



ICDM役員会メンバー

左から3人目
賀川AOSD会長

左から4人目
リナルディーニSEFA会長代理

右端
ダージェンティスSSCI会長、ICDM会長代理

ICDM役員会

鋼製ドラムの更なる発展を目指して

平成23年12月8日 米国 ワシントンDCにて

平成23年12月8日、ドラム缶製造業者の世界組織であるICDMの役員会が米国・ワシントンDCにて開催され、ICDM副会長でAOSD会長でもある、日本ドラム缶工業会の賀川理事長が出席しました。

米国の財政問題、欧州の金融危機、中国などの発展国の成長減速といった大きな流れにドラム缶製造業も影響を受け、アジア、米国、欧州それぞれの地域で最適対応を図りつつあります。これらの情報を共有することは、鋼製ドラムの更なる発展を図っていくのに有益なことです。

SSCIからは北米の顧客から鋼製ドラムのサステナビリティ(持続性)に関する問いかけがあり、AOSD/JSDAの仕方を参考にしたいという発言がありました。

米国の2010年(CY)の鋼製ドラム生産は、2,600万本、前年比25.8%増とのことでした。ドル安もあって化学会社の需要が増えたのが原因とのことで、他容器も増えたとのことです。日本の2010年度(FY)鋼製ドラム出荷は1,450万本、前年度比9.4%増でした。

欧州の2010年(CY)は、2009年を上回るものの、2008年を下回る生産本数との話でした。その間、平均単重が一層軽くなったとのことです。

AOSD国際会議は2013年(3年毎)に行われることがSSCI・SEFAに伝わっています。同じ年にICCR(更生缶の世界組織)の国際会議も欧州で開催されることになったので、SSCIもSEFAも出席者の参加などで不都合が生じることを懸念していました。

ドラム缶製造業者の国際組織図

ICDM 国際ドラム缶製造業者連合会
ボウム会長

ICCR 容器更生業者国際連盟
チェスワース会長

AOSD アジア・オセアニア鋼製ドラム缶製造業者協会
賀川会長

SSCI 米国ドラム缶工業会
ダージェンティス会長

SEFA 欧州ドラム缶工業会
ボウム会長

平成23年12月8日時点

米国視察報告

2011年10月11日～10月19日

ドラム缶工業会では技術委員会事業として今後のドラム缶業界の一層の発展を目指し、構成会社の未来を担う若手社員による視察派遣団を海外に派遣しています。今回は下記のメンバーによって構成された視察派遣団が10月11日から19日までの8泊9日の日程で米国を訪問しました。

参加メンバー

団 長	増田 健一	JFEコンテナ(株)
副団長	有村 光史	ダイカン(株)
	山口 裕輔	(株)山本工作所
	内藤 誠	斎藤ドラム缶工業(株)
	紅谷 徹	日鐵ドラム(株)
	若月 嘉弘	日鐵ドラム(株)
団 員	杉本 誠	日鐵ドラム(株)
	飯塚 豪	(株)東京ドラム罐製作所
	菅 正樹	(株)東京ドラム罐製作所
	谷中 巧	東邦シートフレーム(株)
	遠藤 雅行	JFEコンテナ(株)

全体まとめ

今回の視察は10/11～19の計9日間をかけて米国西海岸のオレゴン州ポートランドから東海岸のノースカロライナ州シャーロットまで横断するという行程であり、日々移動の度に時差が発生する中、改めて米国の広さを実感する視察となりました。また、飛行機への搭乗の都度、厳しいボディーチェックが行われるなど、米国の置かれた現状も感じ取ることができました。訪問先は新缶、更生缶を合わせて3社、5工場を視察しましたが、いずれの工場でも親切、丁寧に迎えていただき、工場見学に加え闊達なる意見交換をすることができました。



視察行程

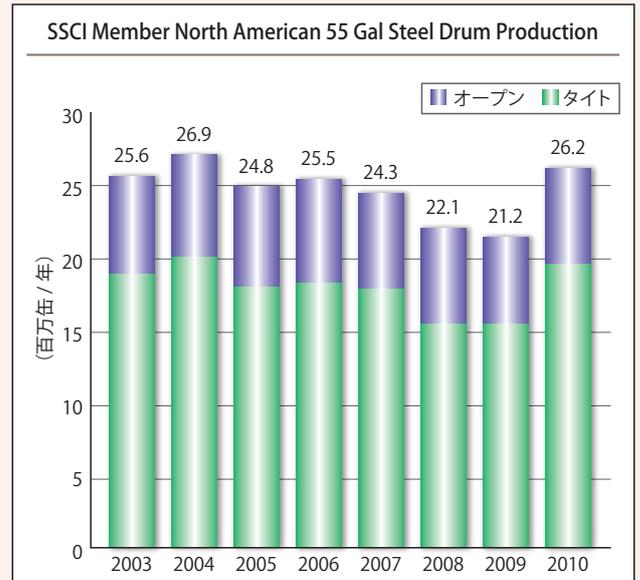


訪問先工場

- Myers Container新缶工場、更生缶工場、IBC更生工場
- General Steel Drum新缶工場
- Berenfield Containers新缶工場

北米ドラム缶市場

北米のドラム缶（新缶）市場は近年減少の一途で2009年は生産本数で2,100万本まで減少しましたが、2010年はドル安に伴う輸出量増加などの影響により、大幅（+500万本/年）に増加しているとのことで、訪問した工場の人々も活気に満ちている印象でした。



北米55ガロンドラム缶生産本数推移

10月11日(火) ポートランド/オレゴン州

成田空港より朝11時過ぎに米国着後その足でMyers Containerの新缶工場を訪問。代表取締役のダニエル・ロス氏に迎えていただき、稼働後40～50年経つという工場を見学しました。（生産規模：1,500本/日）オレゴン州は米国の中でも環境規制が厳しいとのことで、この新缶工場は水性塗料を使用し、また使用した水は工場内で循環し外部へ排出しないように環境への配慮を行っているのが特徴でした。また、色替え時の廃塗料はある程度混ぜて地板に塗布することにより、有効利用されている点も特筆できます。当工場では加工済みの天地板及び胴シートを他社（Greif社）から供給されており、またその土地柄が農産物用途が約4割を占めているとのことでした。



Myers Container新缶工場の天地板置き場

10月12日(水) ポートランド/オレゴン州

午前はMyers Containerの更生缶工場を訪問。ここでは鋼製55ガロンドラム3種類（タイトヘッドドラム、オープンヘッドドラム、改造オープンヘッドドラム）を再生製造しており、



Myers Container新缶工場事務所前にて 左から4人目がダニエル・ロス氏



生産能力は最大120本/時。胴体板厚0.9mm以上のものがここで製造するドラム缶全体の約80%を占めているとのことでした。(訪問当日は非稼働)

『継続可能な企業』をモットーに、企業の信頼性が問われる環境汚染には高い意識を持ち、各所で対策が図られていました。有害煙対策として、焼却設備では約900℃で煙の二次燃焼を行い、製造工程で発生する汚水などは焼却設備の冷却水などに利用する対策を取っており、また空ドラム缶の残渣(油類)は設備燃料に、回収塗料は製品ドラム缶の地板面の塗装にリサイクルするなど、工場内で発生する廃棄物を限りなく『0』に近づけることを目標に種々対策が行われていました。

午後からはMyers ContainerのプラスチックドラムおよびIBCの更生缶工場を訪問。洗浄能力はプラスチックドラムで900本/日、IBCで180基/日で、どちらも薄い苛性ソーダ溶液での洗浄方式で、腐食性の高い内容物については、2~3回使用後スクラップ処理していました。(破碎後チップ状にして売却、発生量:90トン/月程度、ケージは再利用)また、廃液として発生した洗浄液は55ガロン更生缶工場に持込みバーナー冷却用として再利用(全社的な環境対応の一環)していました。

洗浄ラインについては設備も古く手作業も多かったのですが、新設の気密試験方式(ウルトラソニック方式)が設置されており、最小限の設備投資で目的を達成する工夫が見受けられました。

またMyers Containerグループとして全社一丸となり環境対応を実施していた点は見習うべきことと感じました。

また会議室での意見、情報交換中にも窓際の本々にとまる鳥の鳴き声が聞こえたことも印象的でした。鋼板は防錆塗油量を抑えたドライスチールを使用し、生産



Myers ContainerプラスチックドラムおよびIBC更生工場でのIBC洗浄ライン



General Steel Drumのコンテナ待機風景

10月14日(金)
シャーロット/ノースカロライナ州

General Steel Drum見学。(1980年稼働)当工場は2011年2月にMyers Containerに買収されたということですが、住宅地の一角に位置し、低層かつブロック製外壁のため外部には騒音のもれがほとんどなく、外からはとてもドラム缶工場とは思えない静けさでした。



General Steel Drum事務所前にて 中央がテリー・リン氏(取締役)



規模は5,000~6,000本/日(10Hr)とのことでした。製品の出荷においてはトレーラーを倉庫代わりにしており(トレーラー220台、トラクター12台)、製造後の缶をそのままトレーラーに積み込み、お客様先にトレーラーごと置いてくるというシステムはいかにも広い国土を持つ米国ならではのシステムと感じました。

10月15日(土) アッシュビル~デトロイト/ミシガン州

シャーロット近郊視察のため、アッシュビルにある全米最大の個人邸宅「ビルトモア・ハウス」を訪れました。「ビルトモア・ハウス」は1889~1895年にジョージ・ワシントン・バンダービルト2世によって建てられたフランスのルネッサンス様式の大邸宅であり、何と部屋数250室を有する個人邸宅とのことで、その大きさは驚くべき



「ビルトモア・ハウス」全景



Berenfield Containers事務所前にて

ものでした。

またシャーロットからデトロイト経由でシンシナティに移動するおり、飛行機の遅れにより乗り継ぎに間に合わず、急遽デトロイトに泊まることとなってしまいました。その際通訳の秦様には大変お世話になりました。

10月17日(月) シンシナティ/オハイオ州

Berenfield Containers見学。同社は今回見学させていただいたオハイオの2工場のほかに、新缶4工場、プラスチックドラム1工場を有しているとのことでした。オハイオの工場は郊外の一画に2工場(一方は中小缶、他方は55ガロン缶工場)が併設されており、工場建屋内は広々としており(安全通路も広い)、油漏れなどもなく、とても綺麗で良く管理されていました。(55ガロン缶生産規模:4,000~5,000本/日)

また交流会には副社長以下ホテルの一室に参集していただき、事前質問に対する議論、情報交換など有効な時間を過ごすことができました。後日先方のホームページに今回の私達の訪問の紹介記事が掲載されていたことも嬉しい出来事でした。

視察総括

各社との意見、情報交換での共通認識は、ドラム缶品質(特に外観)に対するお客様からの要求厳格化は日・米ともに進んでおり、この傾向は今後更に続くだろうというものでした。容器として基本性能を満たしているかどうかではなく、色々な方面でお客様から信頼をいただける商品を製造するため、今回参加のメンバーが心を一つに、各社それぞれの持ち場でこれからも頑張っていきたいと思えます。また参加者各々にとって、米国という異文化を体験できたことは公私ともにとても有意義であり、こうした機会を与えていただいたこと、またご協力いただいた皆様に一同心より感謝いたします。

福島原発事故と 日本の防衛・ 外交問題

講師：ケビン・メア氏

平成23年11月25日 鉄鋼会館にて

ドラム缶工業会では、平成23年度の企画として、我が国の国レベルでの意思決定例、危機管理例を通して迅速・的確な意思決定はいかにして実現できるのか、社会全体として考えていくために、米国国務省元高官で対日政策30年のキャリアをお持ちのケビン・メア氏を講師として呼びました。

3・11直後に日本の対応でメア氏が問題であると思われた点は、大事な情報を持っていて判断を下すべき政府が重要な情報を持っておらず、悪い情報が上に上がらなかった、政府のトップも責任を取らなかった、従って指揮系統がはっきりしなかったなどでした。日本はコンセンサス社会で、うまくコンセンサスが取れて全員一丸となって進めるときは実行が早いですが、危機管理には弱いとのことでした。危機のときは誰に情報を集めて誰が決定するのかはっきりさせておくのが肝心とのご意見です。

防衛・外交に関しては、軍事的抑止力によって日本近辺の平和が保たれているのが現実であり、日本の民主党もやっと現実派が出てきた感ありとのご意見のようでした。



講演されるケビン・メア氏



講演を聴きに集まった会員



会員からの熱心な質問



別の会員からの熱心な質問

講師プロフィール

1954年米国サウスカロライナ州生まれ。
1981年ジョージア大学ロースクールで法務博士号取得。
国務省に入省、在日期間は19年に及ぶ。
駐日大使館公使、安全保障部長を経て、2006年から3年間、沖縄総領事。2009年に国務省日本部長に就任するも、「ゆすり」発言報道で解任。東日本大震災においては、国務省内の特別作業班で調整役を務める。2011年4月、国務省を退職し、現在はコンサルティング会社上級顧問。

平成23年度上期出荷実績

平成23年度上期出荷実績は、下の表に示す通りとなりました。 上期比0.6%減の394千本となりました。
 200L缶は、前年度上期比0.6%増の6,949千本となりました。 200L缶、ステンレス缶の200L缶、中小型缶のうち100L缶・
 ペール缶は4.0%減の9,774千本、中小型缶は前年度 アス缶・亜鉛鉄板缶・ステンレス缶は前年を上回りました。

平成23年度（4-9月）上期出荷実績

（単位：千本）

缶種	用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比 (%)	
普通鋼薄板	200L缶	868	5,552	348	95	87	6,949	100.6	
	ペール缶	5,140	4,018	317		298	9,774	96.0	
	中小型缶	100L缶	1	65	3		1	70	117.7
		50L缶		56			4	60	82.0
		アス缶型		4			*	4	213.8
		その他容量缶	*	259	*		1	260	99.2
		小計	1	384	3		6	394	99.4
その他	200L缶	亜鉛鉄板缶		22	*	2	4	28	80.2
		ステンレス缶		9			5	14	112.4
		小計		31	*	2	9	42	88.7
	中小型缶	亜鉛鉄板缶		54			80	134	106.7
		ステンレス缶		4			*	5	125.4
		小計		58			80	139	107.3
	合計		6,010	10,043	669	97	480	17,299	—
※前年同期比 (%)		101.7	100.3	93.4	102.9	95.8	100.1	—	
※構成比 (%)		15.7	76.3	4.9	1.3	1.8	100.0	—	

（注）※前年同期比ならびに※構成比は、トン数による。*は単位未満。
 総本数17,298,593本。表上数値は四捨五入による差異がある。

平成23年 暦年出荷実績

平成23年暦年出荷実績は、下の表に示す通りとなりました。 ステンレス缶の200L缶、中小型缶のうち100L缶・亜鉛200L缶は、前年比1.9%減の14,041千本となりました。 鉄板缶・ステンレス缶は前年を上回りましたが、他は前年パール缶も前年比3.1%減の19,744千本、中小型缶も前年比5.1%減の737千本となりました。

平成23年 暦年出荷実績

(単位：千本)

缶種		用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年比 (%)
普通鋼薄板	200L缶 ()は前年比 下段は構成比		1,777 (102.1) 12.7%	11,193 (97.7) 79.7%	706 (94.2) 5.0%	189 (101.9) 1.3%	176 (982.0) 1.3%	14,041	98.1
	パール ()は前年比 下段は構成比		10,408 (100.0) 52.7%	8,087 (93.5) 41.0%	671 (97.6) 3.4%	0 - -	577 (91.5) 2.9%	19,744	96.9
	100L缶		1	129	6	0	1	137	116.9
	50L缶		0	104	1	0	10	115	84.1
	アス缶型		0	8	0	0	0	8	76.5
	その他容量缶		1	473	1	0	2	477	93.1
	その他	200L缶	亜鉛鉄板缶	0	44	1	5	7	57
ステンレス缶			0	22	0	0	7	29	113.9
小計			0	66	1	5	14	86	90.3
中小型缶		亜鉛鉄板缶	0	127	0	0	206	333	107.0
		ステンレス缶	0	8	0	0	1	9	108.2
		小計	0	135	0	0	207	342	107.0
合計			12,187	20,195	1,386	194	987	34,949	-
※前年比 (%)			101.5	97.6	94.5	102.5	95.2	98.0	-
※構成比 (%)			15.9	76.2	4.9	1.3	1.7	100.0	-

(注) ※前年比および※構成比は、トン数による。総本数は、34,949,264本。表上数値は四捨五入による差異がある。

会員			ドラム缶工業会	
<p>《正会員》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 斎藤ドラム缶工業 (株) ● JFEコンテナ (株) ● (株) ジャパンパール ● 新邦工業 (株) ● ダイカン (株) ● (株) 東京ドラム罐製作所 ● 東邦シートフレーム (株) 	<ul style="list-style-type: none"> ● (株) 長尾製缶所 ● 日鐵ドラム (株) ● (株) 前田製作所 ● (株) 山本工作所 <p>《準会員》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 森島金属工業 (株) 	<p>《賛助会員》</p> <ul style="list-style-type: none"> ● エノモト工業 (株) ● (株) 大和鐵工所 ● 三喜プレス工業 (株) ● (株) 城内製作所 ● 東邦工板 (株) ● (株) 水上工作所 	<p>〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10 (鉄鋼会館6階)</p> <p>TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969 e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp</p> <p>URL : http://www.jsda.gr.jp/</p> <p>ひびきNo.63 (平成24年2月20日発行)</p> <p>発行人 ドラム缶工業会 専務理事 事務局長 米倉 隆行</p>	

本誌は環境に配慮した工程で印刷しています。